

ノミ、必ラズ手拭ニテ頼カムリノ上、此笠ノ極テ古ク煤ビタル者ヲ用ヒ、他笠ヲ用ヒズ、京師ハ彼輩編笠、大坂ハ無笠也。

〔甲陽軍鑑品十一第三十六〕一駿河田中御逗留の間に、織田信長より、佐々權左衛門使者にて御音信、からのかしら二十毛氈三百枚、猩々、緋の笠。是は四年さき、公方靈陽院殿都へ御供仕、征夷將軍に備奉りたる、弓矢に縁起のよき笠にて候と、信長申されて、信玄へ送被遣之、信長使者居候處にて、土屋平八郎に其笠を被下、信長に武篇あやかれと、信玄公被仰也。

〔常山紀談九〕東照宮仰に、物具の美麗なるは無益の事なり、又重くするも益なし、○中下部は薄き鐵の笠を著せたるぞよき、急なる時は飯をも炊ぐべしとぞ。

以製作爲名

〔延喜式六齋院〕三年一請雜物

朝使已下女孺已上座料、○中帖笠九十八枚、○中略帖笠九十八枚、○中略長已下料、○中略請内藏寮、

〔延喜式二十三民部〕交易雜物

太宰府（中略）蘭帖笠百卅蓋

〔運步色葉集阿〕編笠。

〔倭訓栞中編一阿〕あみがさ 編笠の義、もとは菅笠、蘭笠などの通名なりしにや、全浙兵制には箬帽を譯せり、

〔人倫訓蒙圖彙六〕編笠 蘭を以て是をつくるなり、當世忍笠、熊谷笠あり、

〔古今要覽稿器財〕編笠

あみ笠は菅或蘭などをもてあみたるをいふのみ、但延喜式にはゆる帖笠も、編笠もおなじものならんとおもはる、然れば編笠はいと古き物なり、

〔和漢三才圖會二十六服玩具〕臺笠 俗云阿美加左 臺卽臺字